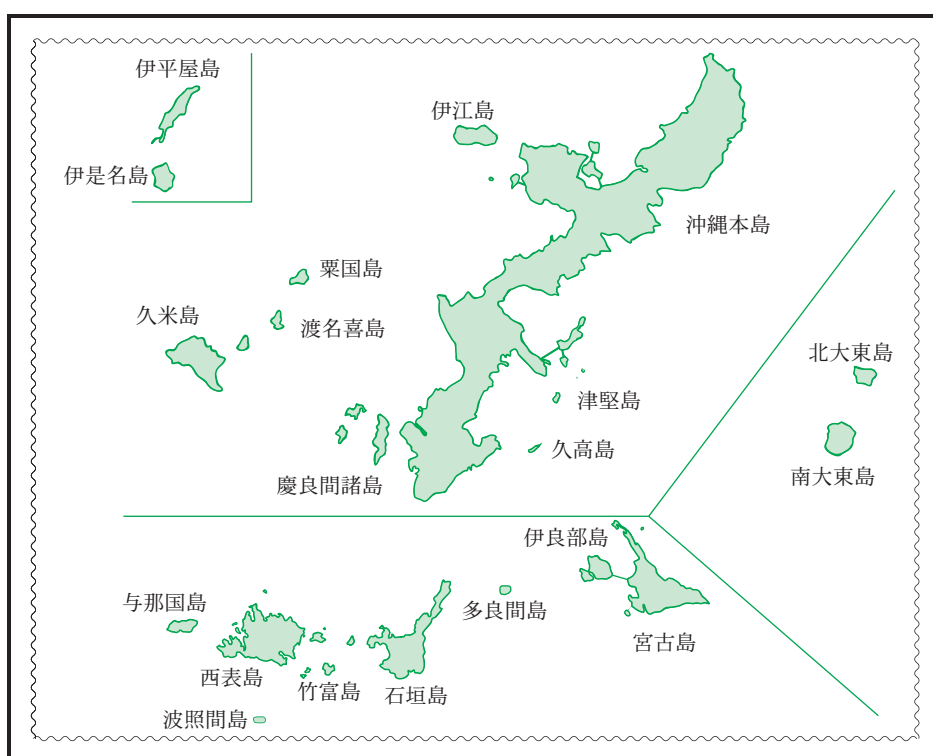




沖縄県小学校長会
沖縄県中学校長会

第 87 号

会 報



も く じ

1. 今年度の活動を振り返って
ウェルビーイングな学校をめざして
学び続ける学校のリーダーを支えるチーム校長会
那覇市立宇栄原小学校 校長 田 島 正 敏 …… 1
2. 特色ある学校づくり
(1) つながり・関係性を大切にする学校を目指して
南城市立佐敷小学校 校長 慶田盛 元 …… 3
(2) 「図南鵬翼の志」を持ち、未来に大きく羽ばたく子どもの育成
宮古島市立下地中学校 校長 崎 山 用 彰 …… 5
3. 校長講話
(1) むずかしいことをやさしく やさしいことを深く
深いことをおもしろく ～「伝える」から「伝わる」校長講話へ～
石垣市立真喜良小学校 校長 磯 部 大 輔 …… 7
(2) 今求められる校長のコミュニケーション能力
伊是名村立伊是名中学校 校長 具志堅 仁 一 …… 9
4. 第76回九州地区小学校長協議会研究大会沖縄県大会参加報告
「九州は一つ」チムグクルこもる沖縄大会
うるま市立城北小学校 校長 伊 礼 美和子 …… 11
5. 第75回全九州中学校長研究大会宮崎大会参加報告
第七十五回全九州中学校長研究大会宮崎大会に参加して
那覇市立城北中学校 校長 仲 間 健 …… 13
6. 第76回全国連合小学校長会研究協議会徳島大会参加報告
「黄金の國」岩手大会に参加して
宜野座村立宜野座小学校 校長 新 城 雄二郎 …… 15
7. 第75回全日本中学校長会研究協議会岩手大会参加報告
「黄金の國」岩手大会に参加して
沖縄市立山内中学校 校長 多和田 勝 …… 17
8. 第65回沖縄県中学校長研究大会・中頭大会
沖縄県中学校長研究大会・中頭大会を終えて
うるま市立高江洲中学校 校長 塩 川 齊 …… 19

今年度の活動を振り返って



ウェルビーイングな学校をめざして 学び続ける学校のリーダーを支える チーム校長会

沖縄県小学校長会 会長
那覇市立宇栄原小学校 校長 田島正敏

一 はじめに

近年の社会情勢は急速に変化しており、VUCAの時代、すなわち変動性、不確実性、複雑性、曖昧性が増す社会に直面しています。このような予測困難な時代において、学校は児童生徒一人一人に様々な社会の変化に対応するのに必要な資質能力を育む教育を推進しなければなりません。私たち校長は学校全体のウェルビーイングを実現するために、学校のビジョンを明確にし、教職員や児童生徒、保護者や地域とのコミュニケーションを通じてそのビジョンを共有するリーダーシップが必要です。そのような中で、校長会は校長のリーダーシップを支え、校長同士の情報共有やベストプラクティスの交換の場として、各校長が直面する課題に対する解決策を見つける場として、大きな役割を果たしています。私たち校長は、変化の激しい時代においても、柔軟でありながらも一貫したビジョンを持ち、未来を見据えた教育の実現に向け、常に学び続ける姿勢を持ち続けなければなりません。

また、校長会は教育政策の提言や改善に向けた活動を行い、教育現場の声を行政や社会に届ける役割も担っています。今年度は、九小協大会沖縄大会を開催するにあたり、九州ブロックの筆頭会長として、また、全連小の常任理事として全連小

校長会に携わる機会をいただきました。中央教育審議会質の高い教師の確保特別部会から出された「審議のまとめ」で述べられている「①学校における働き方改革の更なる加速化 ②学校の指導・運営体制の充実 ③教師の処遇改善を一体的・統合的に推進していくことは、これからの魅力ある教職を作り上げる上で重要なことです。その早期の取り組みを進め実現を図るために、要望書の作成に関わり、それを文科省をはじめ財務省等、そして国会議員に手交する活動や、全連小徳島大会に大会運営委員として関わるなど、全連小活動の価値や意義の「つながり」「学び」「国に声を届ける」ことを実感し、教育改革を行うのはまさに今であり、この機を逃さないという意気込みが直に感じられ、校長会や教育に携わる者が「一枚岩」になることの重要性を改めて認識させられました。

二 全連小理事会・全国小学校長会会長・九小協幹事会

全連小理事会、全国小学校長会会長、九小協幹事会は全て参加型での開催になりました。全国及び九州各県の代表が一堂に会して意見を交わし、各都道府県の状況や課題について共有できたことは大変有意義でした。特に、各会合で懸案事項として挙がったのは、コロナ禍後右肩上がりの不登

校の現状、教員採用試験の志願者の減少と未配置問題など、どの都道府県でも厳しい状況でした。各都道府県では不登校特例校や夜間中学の活用、居場所の確保や不適応の児童生徒の支援など様々な取り組みが行われていること。また、教員不足では働き方改革を推進し働きやすい環境を構築すること、教員の仕事にやりがいと魅力を感じるように注力する必要があることに取り組むこととした。今後、県内外で様々なことに取り組み成果を上げている学校の実践を共有し、児童生徒にとっても、教職員にとってもウェルビーイングな学校をめざし、全会員で推進することの重要性にも気付く会でした。

三 九小協沖縄大会・県中学校長研究大会（中頭大会）

今年度は小・中別開催となり、小学校は「なは」とを主会場に第七十六回九州地区小学校長協議会研究大会沖縄大会を開催しました。九州各県から総勢九百五十名の校長が参集しました。分科会では九つの領域で協議が行われ、各県からの提案者による発表後、活発な質疑と協議が行われました。記念講演では、南島詩人平田大氏による現代版組踊「肝高の阿麻和利」の取り組みなどを通じた青少年育成と地域おこしの実践例が紹介されました。九州各県の校長先生方が沖縄の地で忌憚のない意見を交わし、感動を持ち帰り、それぞれの県の校長先生方で共有し、大会後もさらに交流を重ねつながりあう九州校長会であってほしいと思っています。

中学校は、「かでな文化センター」を主会場に第六十五回沖縄県中学校長研究大会中頭大会が開催されました。開会式後の県教育長講話では半嶺満教育長に「県内の教育課題と対策」と題し、講話をいただきました。分科会では活発な意見交換があり、各地区（学校）の取り組みなど情報共有が

でき大変有意義であつたとの感想をいただいています。記念講演は教育DX推進専門官水谷年孝氏にご講話をいただき、リーディングDXなど多くのDX戦略やGIGA端末の実践事例を学ぶよい機会となりました。大会のスムーズな運営と心配りに対し、感謝の声がたくさん届いています。中頭地区の会員の皆様ありがとうございました。

四 本年度の活動

(一) 地区教育懇談会

地区教育懇談会は、各地区校長会役員と県校長会役員が懇談を通して、県校長会の活動方針と趣旨の共有、教職員の処遇及び教育環境や諸条件の整備等、重要課題について情報交換を行い、学校経営の充実に資することを趣旨に実施しています。今年度は各事項にランク付けをする際、これまで小中全体で課題として挙げられるもののほかに、部活動問題など中学校で要望の高い事項も重点課題として見えるように工夫し、要望事項を絞って行政との連絡会で「校長会からの要望事項」として明確に示しました。教員育成協議会や全連小等での意見交換等でも活用しました。改善・充実に努めながら取りまとめに尽力した県教育行財政部長および各地区の教育行財政部長の皆さんに感謝いたします。

(二) 校長会と行政との連絡会

行政連絡会は、教育行政と校長会が緊密な連絡を図り、学校の管理運営等に関して理解を深め、学校教育の一層の充実に期することを目的に年三回開催しています。

五月の第一回は義務教育課からの行政説明、九月の第二回は県校長会からの要望事項説明、十二月の第三回は要望事項に対する教育行政からの回答がありました。(回答は、令和七年一月会員へ配布予定)

本年度最重要課題として教育庁に要望したのは、

①臨時的任用職員の確実な配置に向けた人材確保について②学校への依頼文書や学校対象調査報告の削減及び簡素化の推進について③小学校の専科配置と中学校教員の増員による働き方改革の推進について④集団宿泊学習の引率にかかる特別枠の設置について⑤児童生徒への教育相談並びに指導・支援を充実させるための児童生徒支援加配の配置拡充について等でした。中でも①に関しては年度途中の臨時的任用職員の確保のために教育行政では教員セミナー(県内外)等の開催、県広報番組による周知活動、大学と連携した取り組みなどを行っていますが、臨時的任用職員の確保が配置に追いつかない状況です。校長会とましても全国の効果的な取り組みの情報を提供するなどして、今後も県教育行政と連携して、学校教育の一層の充実に取り組んでいきます。

(三) 研究活動(研究紀要第三集に集録)

◇調査研究部

持続可能な質の高い教育活動を目指し「働き方改革の推進」について、県の公立学校における働き方改革推進計画『みんなの学校!ピースフルプラン』に示されている「三軸・六視点」を基にしてアンケート調査を行い、結果から考察を行っています。各学校の現状や課題、取り組み状況をまとめ、会員だけでなく、各自治体へも提供し共有しました。

◇生徒指導委員会

テーマ「魅力ある学校作りの推進」、サブテーマ「チーム学校」としての機能する組織の活性化のもと、各地区の十二校の実践事例をまとめて共有しました。各校の事例を簡潔にまとめると、子どもたちが変化の激しい社会で生きていくためには、時代の変化に対応して様々な力を身につける必要があること、そのためには教育課程の改善、学校の整備体制が必要であるという旨でした。

◇教育改革委員会

小学校は持続可能な魅力ある学校作りの視点で、中学校は部活動の適正化の視点でまとめられており、小学校では各校の「働き方改革」の取り組み状況について、多くの効果的な取り組みや実践を紹介し、中学校では中体連・中文連の現状と取り組み事例を紹介し、働き方改革の一助となるよう共有しました。

◇学力向上推進委員会

各地区で効果を上げている学校の取り組みやそれに係る校長の関わりについて、小中学校各地区の実践事例を共有しました。その中で、どの学校の実践も校長の経営方針に沿った(R)PDCAサイクルの構築がされており、学校組織として全校体制で目標に取り組む姿勢が見られました。

五 おわりに

今年度、九小協大会沖縄大会を開催するにあたり、九州各県から集う会員の皆様をイチヤリバチョーデーの気持ちでお迎えし成功裏に終えることができました。また、中学校の県校長研究大会中頭大会では、中頭地区の小学校校長も手伝いに駆けつけたと聞いています。ユイマールの心がうれいですね。これらは今後も普遍的なこととして学校教育でも大切にし、児童生徒一人一人を全面的に支援する教育を充実させる必要があります。

またそれを基盤にして、児童生徒一人一人が夢や希望を持つて伸び伸びと活動できる教育を充実させ、本県の是である『人材を以て資源と為す』を成就する取り組みを着実に推進することも必要です。

結びに、令和七年度の県小中学校長研究大会は那覇大会となり「新報ホール」を主会場に開催します。県内の校長がお互いの実践を共有したり、今後の方向性を確認したりするなど、研究を深めることができる研究大会になることを切望しています。今後、チーム校長会として、未来を見据えた教育の実現に向け、常に学び続けていきたいと思います。

特色ある学校づくり



つながり・関係性を大切にする 学校を目指して

南城市立佐敷小学校 校長 慶田盛 元

一 はじめに

南城市は、沖縄本島南部の東海岸に面し、二〇〇六年（平成十八年）に佐敷町・大里村・玉城村・知念村が合併して誕生し、県庁所在地の那覇市から約十二kmの所にあります。本市には、世界文化遺産の「琉球王国のグスク及び関連遺産群」の一つである「斎場御嶽」は、琉球王国最高の聖地であり現在も多くの人々から崇拝されています。また、観光客に、パワースポットとして人気がある場所です。

本校は、一八八二年（明治十五年）六月二十五日に創立され、二〇二二年（令和四年）六月に百四十周年を迎え、現在百四十二年目となる長く輝かしい伝統を誇る学校です。学校のすぐ隣には、佐敷グスク（琉球三山を統一した、尚巴志とその父尚思招の居城）があり、琉球王国の聖地を巡拝する行事である「東御廻り」のひとつとなっています。

令和六年度、本校児童数は四六十名、学級数二十四学級（内、特別支援学級七学級、通級指導



【佐敷小学校校門前】

二 学校経営

教室（二学級）となっています。

本校の学校教育目標は、「さいごまであきらめずにがんばるたくましい子」「しよらいの夢にむかって進んで学習する子」「きょうりよくし、心やさしく思いやりのある子」と三本柱となっており、「体・知・徳」で構成されています。この学校教育目標の最初の文字を、並べると「さ・し・き」となっており、子ども達にも親しみやすくなっています。

また、令和四年度からコミュニティスクールを導入し、年間五回開催（今年度から内一回は、中学校区として、佐敷中・馬天小・本校のコミュニティスクール委員と合同開催）を行っています。委員は、公民館館長、元PTA会長、地域の企業の方、市役所職員等で構成されており、毎回、学校と地域で連携してできることや地域からの貴重なご意見をいただいています。



【校区合同CSの様子】

（一）学校経営で大切にしていること
学校教育目標に向かって、全教育活動を集約していくために、学校経営で大切にしていることは、以下の三点です。

それは、子どもの居場所づくりにつながることであり、自尊感情を育み自己肯定感を高めると考えています。

二点目として、子どもの協働的な学びと成長を軸として、地域と保護者と学校がパートナーとしての関係性を構築し、互いに意見を出し学び合い、「地域とともに児童を育てる」ことが重要だと思っています。

最後に三点目ですが、教師一人ひとりが将来社会の担い手となる子ども達を、教え導くという崇高な使命と重大な責任を負っていることを誇りに、働きがいのある職場・学校を創りたい、以上のことを大切にして学校経営にあたっています。

（二）本校の抱える課題

不登校・登校しぶり・学級に入れない児童

本校に赴任して、大きな課題だと感じ教頭とこの対応について、最初に協議し取り組んだのがこの課題です。職員室前の会議室・保健室には、児童が数多くいて、安全面の観点から空き時間の職員を配置したり、待機している児童の状況把握や関係性をつくるために職員が来室したり課題を与えたり、保護者と対応したりと職員にとって非常に負担感のあることでした。もちろん、子どものために職員は考えて取り組むことは当たり前といえは当たり前ですが、空き時間や休憩時間等がとられ疲弊していくのが目に見えて感じ取ることができました。

三 具体的な取り組み

この大きな課題に、昨年度は一つ一つの個別の

事案に対して短期的な視点での対応が主であり、中長期的な視点での対応があまりできなかったのが反省としてありました。そのため、今年度は昨年度の課題を受け、中長期的な視点を学校全体で取り組んでいくことにしました。

子どもたちの様子や教職員の意見（各調査結果もふまえ）から、子どもたちの自己肯定感が低いことや友達同士との関係が希薄なこと、地域とのつながりが薄いことなどがわかってきました。そこで、子ども同士や教師との関係性や地域・人とのつながりを大切にしたい具体的な方策をとつていきました。

（一）「エンカウンター・ソーシャルスキルトレーニング」を取り入れる

月曜日の朝十五分の時間、これまで読み聞かせをしていましたが水曜日に移動し、「エンカウンター・ソーシャルスキルトレーニング」の時間を日課表に位置づけ実施をしました。校務分掌にもその主任を作り、主任を中心に毎週することを計画的に実施しています。

また、校内研修でもエンカウンターの実践方法の実技や実践校の取り組みについて講師を招聘し実践的な実技・講話を行ってきました。月曜日の朝にゲーム的な要素のある取り組みを行うことで、少しでも子どもたちが楽しい雰囲気の中で登校できるようにと設定をしたものです。また、学級経営にも直接的によい影響を与え、先生方も積極的に取り組んでいます。



【朝の時間の様子】

（二）昼休み時間を延ばす 火・木の清掃時間をなくし昼の休憩時間を増や

すことで子どもたちが運動場で遊ぶ時間を持てるようにしました。この時間を確保したことにより、子どもたちが学級や学年の仲間と遊ぶ姿が多く見られるようになりました。

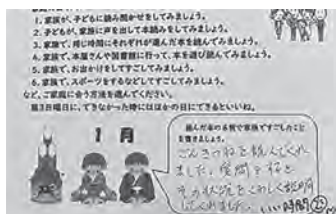
本校は、バスの時間があるために、下校時刻を伸ばすことができないため、時間確保のため、清掃時間をなくして時間を生み出すことにしました。

（三）たてわり清掃の導入

昼の休憩時間を延ばすことで、学級や学年間の子どもの異学年の良好な関係性の改善と同じく子どもたちの異学年の良好な関係性の構築を考えました。その第一歩が、「たてわり清掃」を取り入れた活動です。毎週水曜日の清掃の時間は、「たてわり清掃」の時間として一年生から六年生まで、グループに分かれて清掃に取り組んでいます。

（四）地域・人とながら活動

これまで、沖縄県が取り組んできた「家庭の日」を再認識し活性化していきました。「家庭の日」を「家庭ですぐす日」として家庭に文書を配布し毎月家庭で過ごしたことや読書したことを記入し提出してもらっています。



【家庭の日の取り組み】

コミュニティスクールで提案し、その力を生かし、公民館や児童館、児童の行事をできるだけ第三日曜日に行うことで、家庭がその行事に参加し、家庭の日として過ごしてもらい取り組みをしています。

（五）家庭との連携

家庭学習帳（がんばりノート）をなくし、代わりに夢ノート（でっかい夢プロジェクト）として

取り組みを始めました。夢ノートの計画表には、自分の夢を書き自分がどんな取り組みをしてこの夢の達成のために努力していくのかを記入しています。子どもたちの夢の達成のために、保護者が支え子どもたちの一番の応援団となり、教師は、それを学びとつなげていく取り組みをしています。

（六）その他

地域とつながる活動を充実させるため、子どもが地域に出て調べる総合的な学習や生活科の学習を大切にしたい取り組みをしています。特に、交通環境教育に支援事業を申込み、取り組みました。



【地域での学び】

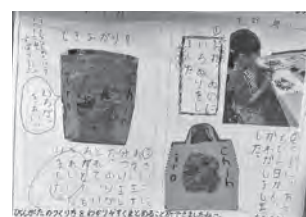
また、市教委と連携し「自立支援室」を立ち上げたり、スクールカウンセラーを二人体制にしたりと行政のバックアップにも助けられています

四 おわりに

このような方策が有機的に絡みあい、相乗効果をもたらすように、日課表の見直しや校務分掌を見直すことで、つながりや関係性を再構築できる環境を整えてきました。

私の実践は、これまで校長先生方が取り組んできたことだけで、特に、目新しいものはないと思います。読んでいただいた校長先生方の学級経営を考えるきっかけになればと思います。

これからも子どもたちの笑顔のため、学級経営の充実に取り組んでいきたいと思っています。



【夢ノートの取り組み】

特色ある学校づくり



「となんほうよく
「**凶南鵬翼の志**」を持ち、
未来に大きく羽ばたく子どもの育成

宮古島市立下地中学校 校長 崎山 用 彰

一 はじめに

本校は、一九四八年（昭和
二三年）四月に当時の下地村唯
一の村立中学校として創立され、
二〇〇五年に下地町・平良市・城
辺町・伊良部町が合併し宮古島市
が誕生し、宮古島市立下地中学校となる。二〇二四
年度で創立七十七周年を迎える。



白い砂浜が東洋一と言われる与那覇前浜ビーチ
や、ラムサール条約登録地の与那覇湾を擁する宮古
島の南西に位置する本校区は、肥沃な土壌に恵まれ
ており、農業の盛んな地域である。しかし近年は専
業農家が減少し、兼業農家が増加傾向にある。また、
農業従事者の高齢化に伴い、その傾向は更に増加す
ることが見込まれている。
地域人口の増加を図るため
に団地建設等も行われてい
るものの、生徒数は一〇〇
人程度を推移している。校
区は広く、与那覇、上地、
洲鎌、入江、嘉手苺、高千穂、
川満の古くからの七集落と、
上地団地・川満団地の二自



治会で構成されている。校区の広さから、生徒の自
転車通学が認められている。

学校周辺には、下地小学校、下地こども園、下地
給食調理場、下地児童館、下地診療所があり、便利
で恵まれた環境であると言える。保護者や地域の
方々には「地元愛」が強く、学校の諸活動に大変協
力的である。

生徒は、このような恵まれたコミュニティを基盤
に、全体的に人間関係も良好で、明るく伸び伸びと
過ごしている。今年度の生徒数は、一学年二学級
四四名、二学年一学級三一名、三学年一学級二六名、
特別支援学級二学級七名の合計一〇八名。教職員は
一四名でスタートした。

主な教育活動としては、今年二五年目を迎えた台
湾国際交流事業、四五年目を迎えた強歩大会（学校
から東平安名崎を往復する全長四七・四キロメート
ルのコース）など、特色ある教育活動を展開してい
る。

二 学校経営方針（学校ブランドデザイン） に基づく学校経営

学習指導要領「前文」の内容を基本理念とし、「絆」
「世界」「未来」の三つを学校経営の基本コンセプト



トとし、生徒一人一人が「凶南鵬翼の志」を胸に、
未来に向け大きく羽ばたいていくことを目指した教
育活動を展開する。

（一） 学校教育目標

- 豊かな心を持つ生徒
- 自ら学ぶ意欲を持つ生徒
- 健康で粘り強い生徒
- （二） 学校経営目標

○ よりよい未来の創造と自己実現を目指し学
び活動する生徒の育成

（三） 学校スローガン「未来は『下中』から創ら
れる」自己実現を目指し一人一人が☆主人公
☆、学校経営三つの基本コンセプト「絆」
「世界」「未来」、重点的に育成を目指す六つ
の資質・能力「主体性」「協働性」「言語能力」
「国際性」「自己調整力」「キャリアプランニ
ング能力」

（四） 六つの資質・能力を育成する二大プロジェ
クト

生きる力を育む「確かな学力」については
「学びづくり」プロジェクトで、「豊かな心」
「健やかな体」については「絆づくり」プロ

ジェクトで関連する教育活動を推進し、学校教育全体として「知・徳・体」調和の取れた教育課程を編成するとともに、「魅力ある学校づくり」に資する。

①「学びづくり」プロジェクト

重点目標（キーワード）

○「自立した学習者の育成」

○「組織的な授業研究」

②「絆づくり」プロジェクト

重点目標（キーワード）

○「安全・安心な居場所づくり」

○「なすことによつて学ぶ」

（五）

校内研究（研修）を中核とした組織的・協働的な学力向上

本校は、本年度校内研究（研修）テーマを「自己実現を目指し主体的に学ぶ生徒の育成」対話・論証・振り返り活動の充実を通して、授業においては対話や論証の場面等の言語活動を重視し、また授業や帰りの会での振り返り活動へ接続しながら自己調整サイクルを確立し、その中で生徒が自らの学びに対する自己調整力を発揮し、自立した学習者としての育ちが図られるよう本テーマを設定した。

三 「魅力ある学校づくり」に資する、特色ある二つの教育活動

ここで取り上げた二つの教育活動は、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、活動を縮小あるいは中断した時期もあったが、この二年間で元通りの教育活動が展開されるようになった。

（一）台湾国際交流事業

① 本校と台中市漢口國民中學との国際交流事業は今年で二五年目を迎えた（新型コロナ

ウイルス感染拡大防止のため、本校からの台湾訪問は二〇回目となる）。目的は、「漢口國民中學との国際交流を通じて、グローバルな視野を持ち、互いの文化を尊重する態度の育成を図る」「国際社会における相互交流や情報交換に必要なコミュニケーション能力の育成を図る」としている。

② 本年度の取組



- ・四月……全日本トライアスロン宮古島大会に出場するチーム台湾選手団への応援幕作成と設置
- ・六・七月……漢口國民中學の卒業式に寄せて、本校全校生徒で祝福メッセージ動画の作成と配信。リモートでの国際交流（顔合わせ、自己紹介等）。台湾からの国際交流団受け入れ（隔年実施）。
- ・八月……本校から台湾への国際交流団派遣（毎年実施）。
- ・九月……台湾国際交流事業報告会の開催。
- ・十月……台湾建国記念日「双十節」に因んだ給食メニューの提供（三学期は旧正月に因んだメニュー提供を相談中）。

（二）強歩大会

① 本大会は一九八〇年にスタートし、今年で四五周年を迎える。ねらいは、「学級の目標やスローガンの達成に向けて、協力し合ったり、励まし合ったりする」「自己の

目標を設定し、達成に向けて自主的に取り組む」「最後までねばり強く歩く」としている。

② 競技方法

- ・コースを東平安崎折り返しAコース（四七・四km）、城辺小学校折り返しBコース（二〇・四km）を設定。体力に合わせてA・Bいずれかのコースを選択し、完歩を目指す。
- ・制限時間は午前八時三〇分から午後五時までの八時間三〇分とする。
- ・生徒は中琉文化経済協会より寄贈されたTシャツを着用して出場する。

四 おわりに

生徒の実態としては、自己肯定感が高く、自分の将来や夢に関して前向きに考えている生徒が多い傾向にある。一方で、指示されたことは素直に取り組むが、やや受け身的な態度が見られたり、難しい問題に直面すると粘り強さに欠けたり、諦めたりする面も見られる。

今後一人一人の子ども「良さ・強み」をさらに伸ばしていくために、全職員、保護者、地域の方々と巻き込んだ教育活動を展開していきたい。子ども

たちが将来、持続可能な社会の創り手としてしなやかに逞しく育つよう、本校のマスコットキャラクター「となん」に表現されている「凶南鵬翼の志」を持ち、夢や希望に向かって大きく羽ばたいていくことを切に願う。



校長講話



むずかしいことをやさしく やさしいことを深く 深いことをおもしろく

「伝える」から「伝わる」校長講話へ

石垣市立真喜良小学校 校長 磯部 大輔

一 はじめに

本校は石垣市で二〇番目の学校として平成九年（一九九七年）に開校しました。八重山地区で最も新しい学校です。創立二八周年を迎え、児童数は二六六名（令和六年一月一日現在）の市内規模校です。

今年度は石垣市及び沖縄県教育委員会の研究指定校として、「自らの学びに能動的にかかわる『自律した学習者』の育成」をテーマに研究しています（石垣市指定は昨年度から継続中）。

◆柱①午前五時間制と「学びのふり回り時間」の設定による「自学自習力」の育成

◆柱②シンキング・サイクルを意識した「複線型授業」による「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実

これらの研究をはじめ、教育活動すべてにおいて、「手段が目的になっていないかを常に問う」という職員のルールに則り、学校教育目標「幸福」の実現に向けて日々実践を重ねています。

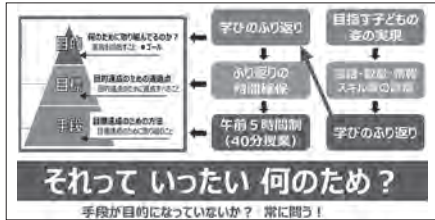


図1：グランドデザインから

二 校長講話の目的

校長が直接語りかけることで、児童が最上位目標に向かって自分ごととして考えるきっかけにするためだと私は考えています。本校であれば、「辛動（さちどう）：自分とみんなの幸せのために行動する」ってこういうことか！じゃあ私はこうしていいかな？と考えるきっかけにするためです。また、児童に向かって話したりアウトプットさせたりしますが、教職員に向けたメッセージでもあります。

三 校長講話で心がけていること

みなさんご存知ですか？

検索窓に「校長の話」と入力すると、出てくるのは：「エンドレス」、「なぜ長い」、「倒れる」といったネガティブなワードが満載です。しかし、それも過去の話です。本会報を読むにつれ、現職の校長先生方がさまざまな方策を駆使して素敵な校長講話を行っていることを知りました。今回は、私が心がけていることを三つ紹介します。

まず、私が校長講話（以下、お話集会和表記）で心がけていることは「聴いてもらう」ことです。「人は相手の話の八〇％は聞いていない」という話を耳にしたことがあります。しかし、校長就任当初、私は勘違いしていました。校長というだけで児童は注

目してくれると思い、「早く早く」、「校長先生は何を話すのかなあ」といった雰囲気、気を良くして話すと、すぐに興味が薄れ、退屈して、最終的には隣の児童とおしゃべりを始めるという状況に。基本的に「相手が校長であろうが、人の話は聴いていない」という大前提を忘れてはいけないと痛感しました。では、どうすれば聴かせることができるのでしょうか？私は「つかみ」と「アウトプット」を重視しています。

「つかみ」では、クイズや写真、小道具、登場の仕方など、児童を引き込むことに重点を置きます。これまで授業の導入で気をつけていたように、コンパクトでインパクトのある「つかみ」ができるかどうか、毎回非常に悩むところです。そして、毎回「アウトプットすること」を知らせることで、聴く必要性を感じさせたいと考えています。

二つ目は「視覚に訴える」ことです。話すことが上手くない、伝える力が弱いことを自覚している、効果的なスライド活用を心がけています。これはスライドの効果工夫するということよりも、インパクトのあるスライドを作成することを目指しています。

対象は六歳から一二歳までの幅広い年代なので、一枚のスライドに情報（文字）を詰め込みすぎない「ワンスライド・ワンメッセージ」を心がけ、内容に合った適切な画像の選択も大切にしています。



図2：スライド例

三つ目は「アウトプットさせる」ことです。

「ドライブスルー効果」をご存知の方も多いでしょう。これは、車の助手席に座っているとかなかなか道を覚えられないのに、自分で運転すると道はもちろん、景色など周囲の状況までよく覚えているという現象です。言い換えれば、運転者は主体的で、助手席の人は受動的ということですね。ぼーっと話を聴く児童を少なくするために、「最後にアウトプットする」ことを伝えておいて、お話集会終了後には必ずアウトプットさせます。アウトプットは、ペアや近くの人に伝える、用紙に記入する、グループクルスルームやロイロノートで入力するなど、その学校や児童に合った効果的な方法を用いています。

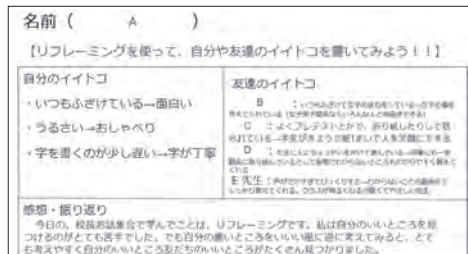


図 3：Google スライドによる児童の振り返り

四 お話集会の評価

OECDのラーニング・コンパス2030で推奨されているAARサイクル（見直し・行動・振り返り）を児童に説いている身としては、自身の振り返りも大切にしたいと考えています。

校長就任初期のお話集会では、自校の教職員に「今日のお話どうだったかなあ？子ども達に伝わったと思う？」などと尋ねていましたが、もちろん付度した答えしか返ってこない！これでは意味がない！そこで、学びの主体は児童であることから、児童がどう感じたのかを集めることにしています。紙媒体の振り返り用紙やロイロノート、グループクルスルームなどに記入させます。

自分自身で振り返る方法としては、録音して聴き直すことを継続しています。あれこれ考えながらスライドを作成するので流れは頭にあり、シナリオは作りません。流れはスムーズですが、どうしても気になる部分が毎回あります。早口になる、語尾がはつきりしない、「えー、あー」といったドッグワードが出てしまう…。徐々に少なくなってきたいます、が、まだまだ改善の余地有ります。

五 お話集会実施後

「今伝えたい！」と頭をひねって考えたメッセージを、その一回で終わらせるのはもったいない、また、何よりも効果を高めるためには、事後の取組も大切だと考えているので、次のようなフォローアップを行っています。

(一) 各担任や専科に向けて
ねらいや事後指導について校長だよりで事前に確認し、事後指導に活かします。



図 4：校長だよりでねらいを共有

(二) 児童に向けて

お話集会スライドに説明を加えた自動スライドショーを作成し、給食時間に放映したり、玄関の電子黒板で繰り返し放映したりします。

(三) 保護者に向けて
スライド（抜粋）と内容説明を学校便りで配布し、家庭でも同じ方向の声かけをするきっかけとします。



図 5：保護者向け配布資料でも共有

六 終わりに

もう十年ほど前になりますが、当時義務教育課長だった大城朗先生の校長時代の講話スライドを見る機会がありました。生徒が活躍する姿を捉えた膨大な写真や、メッセージが心に響くスライドなど、それまで聴いてきたものとはまったく異なる校長講話に衝撃を受けました。この経験は私の教育信条である「むずかしいことをやさしく、やさしいことを深く、深いことをおもしろく」とも合致し、「自分が校長講話をするなら」という前提で様々な事象を考えるきっかけになったように思います。

子ども達の振り返りから、「おっ、今日はけっこう伝わった!」、「あかん、全然ちがう受け取り方をされてる…」など、その時々で出来映えは異なります。まさに「伝える」と「伝わる」は違うことを実感します。学びと同様、主語が「校長」ではなく「児童」となるように挑戦を繰り返す日々です。

校長講話



今求められる 校長のコミュニケーション能力

伊是名村立伊是名中学校 校長 具志堅 仁一

一 はじめに

豊かな自然に恵まれた伊是名村は、沖縄本島北西に位置し、一日二便運行のフェリーが主な交通手段である。

歴史的には百姓から琉球国王にまで上り詰めた「尚円王金丸（かなまる）」生誕の地と知られており、公事清明（クージシーミー）は四月の初めに沖縄全域に先立つて行われ、その後沖縄本島各地で清明祭（シーミー）が執り行われるなど沖縄文化の中心的な役割を持つ「自然と歴史文化」の島である。

尚円王金丸の言葉である「海島有大志」（高い志を持つ生徒は崩れない）の理念の基に、学校教育目標を「学習意欲に燃え自ら進んで学ぶ生徒（知）、情操豊かで思いやりのある生徒（徳）、心身ともに健康でたくましい生徒（体）」を掲げ、地域と連携した学校経営に努めている。

令和六年度、全校生徒四七名。全体的に明るく素朴であり、上級生と下級生、男女間で仲が良い。部活動は男女



バスケットボール部、男女ソフトテニス部、女子バレーボール部、サッカー部があり、少人数の中で活発に取り組み、他校との合同チームを組んで各大会に参加している。ハリー大会や豊年祭などの地域行事や村内一斉清掃などのボランティア活動にも積極的に参加し、いざな88トライアスロン大会では運営にも協力している姿が見られる。

高校進学後は親元を離れた生活を余儀なくされるため、島全体で「島たち（発・立）の教育」として生徒たちの無限の可能性を広げ、将来を「生き抜く力」の育成に努めている。

また、令和五年度は「リーディングDXスクール事業」の指定を受けたことで、授業において生徒自らタブレットを活用した報告会やレポート作成に取り組み、ICT機器を活用した他校とのオンラインによる交流、琉球大学と連携した防災教育の取組、男女バスケットボール部がBリーグと連携したスマートコーチングの取組などこれまでとは違う体験活動も実施することができた。

伊是名村で生まれ育ったことを誇りに思い、大きく羽ばたく「生き抜く力」を育むために、保護者・地域・関係機関と連携を図り、日々の教育活動を推進している。

二 校長講話について

子どもたちを心身ともに健全に育てるためには、保護者・地域の方々と連携協力を図るとともに、校長としての発信力を含めたコミュニケーション能力がますます重要となっている。

すぐれた校長講話は、子どもの心を動かす大きな力を持っていると言われている。

日常、子どもたちと直接接することの少ない校長にとって、月一回、わずか十分にも満たない本校の校長講話ではあるが、生徒達の聞く力を高め、子どもたちとの人間的な関わりを深め、豊かな心を育むという意味では極めて貴重な時間と場となる。

校長としてこのことだけは是非伝えたいという強い思いとそのための十分に準備をして臨み、人間的な語りかけを行いたいと常に考えている。

校長講話を実施する上で次の事項に留意しながら実践している。

① 聞き手である生徒を意識する

日頃から教室を回り、生徒の行動を観察し、実態を踏まえたリアリティのある話題・題材を拾い集め、生徒は何を聞きたがっているのか、何に関心があるのかということを考え、分かりやすく内容的にも深まりのある話題を常に意識して話すようにしている。

② 伝えたいメッセージを絞る

伝えたいことを一つに絞り、様々な角度から何度も伝えたい内容に迫るように話す。また例えば話をうまく織り交ぜながら話すことで、生徒が理解しやすいように心がけている。話す時間には限りがあるため、話が脱線したり、時間超過とならないように大事なことはきちんとメモ書きして校長講話に臨む。

③ 文章は出来るだけ短く、キーワードを示しながらゆっくり、はっきりと伝える。

大事なことが何だったかわからなくならないように、話すときは短く、ゆっくり、はっきりと話し、講話後に話の内容が残るような話し方を心がける。

生徒たちに向けての講話であっても生徒は家庭に戻り、親に今日あった話題を話すこともあるため、伝える言葉を意識しながら取り組んでいる。

三 具体的実践例

① 全体集会における「校長講話」

毎月一回、生徒たちが充実した学校生活を築き上げていく上での心構えや共通理解を図る場として「全体集会」が設定されている。主な内容は各専門員会の活動計画や取り組みの反省、表彰や事前に決められた各学級代表の生徒が一分間スピーチも行う。

全体集会は毎月二十分程度の短い時間の中で校長講話の時間（三～五分）も設定されている。これまで「言語活動の取組」「フォーサイト手帳の活用」「学校行事における生徒の様子」「学校行事前の心得」など日頃の学校生活を題材にした話や関心を持って欲しい時事問題、身近な問題、生徒の活躍の奨励、安全確保等について伝える場としている。その際、道徳的内容も意識しながら、直接生徒と関わるの機会を設ける等の工夫も行っている。短い時間だからこそ日頃の情報収集や構想を練ることを大事にし講話の内容を組み立てている。

② アーサの会（読み語り）

毎月一回、朝の読書時間（八時十分～八時

二五分）の十五分程度、保護者や地域の方々、教職員が講師となりアーサの会（読み語り）を行っている。各学年に一人ずつ配置し、十五分間にそれぞれの経験や知識、お勧めの本の紹介など伝えたいことを語ってもらっている。「十五歳の島たち」までに、生徒達が視野を広げる手助けになればと多くの方々からの協力を得ており、令和六年度十一月で第二七三回を迎えている。講師の方々の様々な人生観や普段出会わない本を知るきっかけとなり、生徒達にとってはとても貴重な時間となっている。その中で校長としてこれまで「進学後の将来像」（三年）「コンセンサスゲーム（海難事故からの脱出）」（二年）「SDGsパスポートの活用」（一年）を実施した。読み語りを終えて生徒たちの書いた振り返りや感想を見ることが楽しみの一つとなっている。

③ 週案コメント&教職員便り

毎週、教職員からの週案提出時に週一回週案へのコメントとA四サイズ一枚の便りとして教職員便りを先生方へ配布している。週案へのコメントではコンプライアンスの徹底をはじめ、学校行事における生徒の活躍の賞賛や激励、先生方への感謝の気持ちを記すなど意識づけを図っている。

また、教職員便りでは自分の体験はもちろんのこと、書籍・雑誌・新聞・インターネットから収集するなど常にアンテナを張り巡らせ、様々な情報源から得た内容も盛り込みながら作成している。週案コメントや教職員便りを作成する際は、誤字脱字がないように細心の注意を払っている。内容については、人間味溢れた内容を心がけ、一人一人の立場や力量が異なる教

職員との信頼関係がより一層深まるような話題を常に考えている。そうすることで学校文化の変化となり、同時に一人の人間として親近感を持つてもらい、ポジティブに話を受け止め、共に魅力ある学校づくりに取り組むことができる。と考える。

四 終わりに

校長講話の場は、校長として生徒、教職員や保護者、地域に対し、自分の思いや考えを分かりやすく具体的に伝える場であると同時に、聞き手の信頼や興味を勝ち取り、魅力ある学校づくりの礎となる場でもあると考える。

このような校長講話とするには、真摯に事前準備に取り組む必要がある。そのためには、校長の話す力はもちろん、普段から生徒、教職員や保護者、地域の方々の考えや思いをしつかりと受け止め、言葉を通して思いや考え、事柄を伝え合うコミュニケーション力が、極めて重要な能力である。と考える。

これからも生徒・教職員・地域の方々それぞれの立場を十分に考え、分かりやすく丁寧に、情熱を込めて真剣に自らの言葉で語り掛ける校長講話に取り組んで行くことを決意するとともに、「十五歳の島たち」までに生徒たちの心を豊かにするために、情報収集に力を尽くしたいと思う。



第七十六回 九州地区小学校長協議会研究大会沖縄県大会に参加して



「九州は一つ」 チムグクルこもる沖縄大会

うるま市立城前小学校 校長 伊礼 美和子

はじめに

大会主題「自ら未来を拓きともに生きる豊かな社会を創る日本人の育成を目指す小学校教育の推進」、副主題「多様な価値を持つ他者と主体的・協働的に学び合い、豊かな未来社会を創造する子どもを育む学校経営」のもと、第七十六回九州地区小学校長協議会研究大会沖縄大会が、八月六日～八日にかけて本県那覇市において開催された。

本大会には、九州各県から九百二十六名の会員が参加し、一日目の幹事会、分科会運営連絡会を皮切りに、二日目は全体会と分科会、三日目には記念講演の日程で充実した大会となった。全体会は、那覇文化芸術劇場「なはーと」、分科会は沖縄県教職員共済会館を含む四会場、九つの分科会に分かれて実施され、会員の皆様の卓見や多様な視点からの質疑等を含め、活発な協議を行うことができた。

今回は本県が開催県ということもあり、「イチチャリパチヨーデー美ら島沖縄で子どもの未来を語ろう」をキャッチフレーズに、会場入口の「めんそうれ」の歓待幕や琉球料理を取り入れた弁当等、沖縄県小学校長会メンバーのおもてなしのチムグクルを随所に感じる大会となった。

二 大会主題説明

大会に先立ち、全体会において大会研究部長より研究主題の説明が行われた。本大会は、時代の要請や社会の変化に対応するため、「価値観の違いや変化を前向きに受け止め、自らの力で未来を切り拓く日本人の育成」を主意に設定された全国連合小学校長会の研究主題のもと、副主題を「多様な価値を持つ他者と主体的・協働的に学び合い、豊かな未来社会を創造する子どもを育む学校経営」とし、新たな視点で設定し研究を深める事にしたとの説明があった。

そして、本大会では、研究主題・副主題に基づき実践研究されたことを共有し、未来社会を創造する子ども達を育成する経営者として求められる理念と指導性を究明していきたいとの決意を表しておられた。

三 全連小報告

全連小活動の価値や意義は「つながり 学び 国に声を届けること」であり、「教育改革推進のためにも『今が正念場』、教育に携わる者が一枚岩となることが大事である、凝集性を高めたい。」とおっしゃっていた。そして、国の動向として左記の報告があった。

・働き方改革について
・令和の日本型学校教育」を担う質の高い教師の確保のための環境整備に関する総合的な方策について（審議のまとめ）
・経済財政運営と改革の基本方針2024（骨太の方針）の原案閣議決定について
特に、働き方改革については「審議のまとめ」にある「三本柱の一体的・総合的な推進」を核に処遇改善や定数改善が実現されること、校長として学校の働き方改革を加速化することが大事であるとの説明があった。

四 分科会

分科会は、九つに分かれ、研究協議が行われた。左記に私が参加した第九分科会の発表を報告する。

○第九分科会「自立と共生」「社会と連携・協働」研究主題 特別支援教育の推進及び学校・家庭・地域との連携・協働と学校段階等間の

接続・連携の推進

協議題① 子どもの自立を図る特別支援教育の推進

研究テーマ 自立と共生を図り実践的な態度を育む教育の推進並びに家庭・地域等との連携

提案者 有田町立有田中部小学校 小柳英樹 校長

【主題設定の理由】

特別支援教育では、子どもの自立と共生が求められている。その実現のために、学校だけでなく組織的な連携が必要と考える。有田町では、各小学校が単独で連携している現状に限界を感じ、町内四小学校の校長がリーダーシップをとり、組織的な指導や支援の共通理解の下、協働して取り組むことについて研究した。

【研究の実際】

◎子どもの自立を目指した校長の役割

①課題の見直し

・町内全教職員にアンケートを実施し、特別支援教育に対する意識や配慮状況等を課題把握

②各種自主研修会の実施

- ・特別支援学級在籍児童の保護者による講話
- ・特別支援教育専門の退職校長による講話
- ・特別支援学級担任による講話

③実践計画作成と提案

- ・視覚支援の実施

- ・年度初めの体制づくり

④校内での実践の推進と状況把握

- ・組織的体制での実践

- ・校長の小さな成長に対する見取り・評価

◎家庭や地域、関係機関等との連携

①次年度を見据えた教育支援相談

- ・保護者と職員だけでなく関係機関（SC・SW、巡回相談・特別支援教育エリアドバイザー）と連携した支援

②年度初めの支援計画や指導計画作成と実行

- ・教育構想に特別支援教育の方向性を明記
- ・特別支援教育年間計画を全職員で共通理解

③円滑な教育活動の保障に向けて

- ・指導計画の随時更新

- ・関係機関との組織的・継続的な連携

【所感】

教職員アンケートや自主研修

（保護者や特別支援学級担任の講話）を計画し、当事者の思い

に耳を傾け、課題を焦点化して

いることに感心した。また、町

内四校共通実践を行う等、大変

興味深く、今後の参考となる発

表であった。

協議② 家庭・地域等と連携し、組織的に充実

した教育活動を推進する学校づくり

研究テーマ 学校運営協議会と地域学校協働活動

の組織的・計画的な取組の推進



提案者 都城市立高崎麓小学校 今村隆行 校長

【主題設定の理由】

先行き不透明な社会において、誰一人取り残すことのない、持続可能な社会を維持・発展させる必要がある。また諸課題の解決・改善を図るためには、校長としての役割と指導性をもとに学校・家庭・地域が連携を深め、協働して未来の創り手である子ども達を育てる必要がある。そこで、連携という言葉の起点に研究を進めた。

【研究の実際】

◎学校運営協議会との連携と協働

- ・学校運営協議会の組織・人材の工夫
- ・学校運営協議会の活動等の周知
- ・職員との合同研修会の実施

◎地域学校協働活動と異校種との連携

- ・地域人材確保の工夫（交流サロン・ボランティア団体との連携）
- ・小中学校及び自治会、行政を含むミーティング
- ・や近隣高校生による家庭科（小学校）の指導

◎地域との連携を図るための教育課程等の工夫

- ・カリキュラム・マネジメントの工夫【近隣校との合同学習（総合的な学習）
- ・地域との連携による避難訓練や地域行事参加

【所感】 家庭・地域との連携を深めることを目的にした

学校運営協議会の活動を広く周知する手立てが参考になった。また、分科会協議で話題に上がった「自

走するコミュニティスクール」を目指したいと思っ

た。そのためにも、実働できる人選が鍵となるこ

とを改めて痛感した。

成果

校長 周知

学校運営協議会

合同会議 学校経営

CS 1.8

協議会 キャリア教育 連携

協議会

協議会

協議会

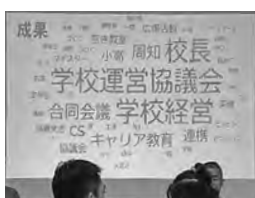
協議会

協議会

協議会

協議会

協議会



るチカラ

講師 平田 大一 氏

南島詩人であり、演出家・脚本家等として活躍する平田氏の手掛けてきた現代版組踊りシリーズや学生時代のエピソードをもとにした講話であった。

特に、平田氏自身の経験を元に、高校生の時に記したという「はじまりもおわりも自分が決める。だから自分の人生に行き止まりはない！」という力強い言葉が心に残った。「人づくりの種は『感動体験』であり、種をまかないことには芽は出ない。」ともおっしゃっており、私達は、子ども達や職員の可能性を信じ、感動体験に出会う際の、自己決定のプロセスに寄り添える存在でありたいと思った。

講演の終盤には、九州各県の校長先生方が一斉に「ハッ、ハッ、イヤーサーサー」とかけ声を出し「ミルクムナリ」を踊ったが、まさに「九州が一つ」となった瞬間であり、壮観であった。

おわりに

校長として本校に赴任し、二年目の私にとって、本大会への参加は、多くの学びを得る機会であった。特に第九分科会では、研究発表や研究協議を通し、九州各県での実践や情報を共有し、大変有意義な時間となった。「イ

チャリバチヨーデー 美

ら島沖縄で子どもの未来

を語ろう」のキャッチフ

レーズのように、本大会

で出会った校長先生方と

の縁を大切に、未来を担

う子ども達のため、充実

した教育活動を推進し魅

力ある学校経営に邁進し

たいと思う。



第七十五回 全九州中学校長研究大会宮崎大会 参加報告



第七十五回 全九州中学校長研究大会
宮崎大会に参加して

那覇市立城北中学校 校長 仲間 健

はじめに

第七十五回 全九州中学校長研究大会宮崎大会が、令和六年八月十九日（月）～二十一日（水）までの日程で開催された。宮崎観光ホテルをメイン会場、分科会場として他二ホテル、計三会場が会場。「新たな時代を切り拓き、よりよい社会を形成していく日本人を育てる中学校教育」（全日中研究協議会同一主題）を大会主題とし、令和五年度の大分大会に続き参集型の開催となり、沖縄県からは、事務局を含め二十二名の参加となった。

一 全体会

（一）全日中報告

「学校からの教育改革」

全日本校長会 会長 青海 正

五つの柱を立てての報告であったが、特に「現行学習指導要領の実装」、「社会の変化」、「教育振興計画（第四次）」が興味深かった。現行学習指導要領は、「子どもの目線、視点」でとらえている。その視点、目線の先のゴール（内容・方法）が示されている。方法にあたる「どのように学ぶか」の視点としての主体的・対話的で深い学びについては、全日中学校長会アンケートをもとに、次のように分析・説明。
Q「主体的・対話的で深い学び」での向上する面は？

A 学校の取組変化の表れとして「協働・協力する力」がトップ。

Q「主体的・対話的で深い学び」で何が大切？

A「子ども同士の協力」

Q「主体的・対話的で深い学び」で実施する上での課題は？

A「時間（研修）」

主体的に学びに向かう力の二つの側面のうち、自らの学習を調整しようする側面については「勉強しても、結果が伴わない場合、子ども自身がやり方を変える（調整する）ことが大切」と例を挙げて説明していた。

生徒質問紙（全国学テ）学力とのクロス集計結果から、「考えを発表、上手く伝わるよう工夫して、課題解決に向け自ら取り組みたいか」の問いに対して、高い回答ほど学力調査での正答率も高い。そのことから、自分の考えをまとめる活動が大切である。

柱の一つ「社会の変化」では、先行きが不透明で、将来の予測が困難な状態VUCAの時代においては「他



者との協働」について、ますます学校で学ぶことになる、学校の役割を説明していた。

「教育振興基本計画」の二つのコンセプト

① 持続可能な社会の創り手の育成

「主体性、リーダーシップ、創造力、課題設定・解決能力、理論的思考能力、表現力、チームワーク」を備えた人材育成

② ウェルビーイングの向上

「幸福感、学校や地域でのつながり、協働性、利他性、多様性への理解、社会貢献意識、自己肯定感、自己実現等」を調和的・一体的に育む

（二）研究主題説明

社会の形成者としての人間力の向上を図ることが重要であり、そのために、学校の教育力と教師の指導力を高め、生徒の資質・能力育成が求められる。

【所感】

現行学習指導要領となり四年目を迎えた。自校の子どもたちの実態、取組実践と照らし合わせながら、指導要領の目指す姿となっているのか、振り返る機会となった。特に「どのように学ぶか」については、まだまだ教師主導の授業形態が多く、「主体的な学び」に向けた意識改革・研修の必要性を痛感。また、実態把握や方針の根拠としての各種データの重要性も改めて認識させられた。

二 分科会（第五分科会）

○研究主題

「多様化した教育課題に対応できる学校経営と教職員員の育成」

〈協議題一〉教職員の専門性と指導力を発揮する研修や学校運営の在り方

提案（佐賀県・佐賀市立中学校）

① 「協働的な学び」の学び

市校長会主催の研修会を午後六時～八時、全5

回、市立研究所において開催。内容は校長・指導主事講話、座談会、実践報告、授業と振り返り課題改善、今後に向けて等、また、「かんだん授業参観」と称し、先進実践校授業公開に取り組んでいる。

② 教育委員会（研究所）と連携し、学びの場の確保（①の校長会主催研修会）

◎効果（授業改善の空気の変化）

（協議題二）学校経営に積極的に参画する教職員の育成や人事評価

提案（福岡・須恵町立須恵東中学校）

学校の現状・課題として、若い教員急増・ミドルリーダー配置なし。その対応としカリキュラムマネジメント推進・学校経営の円滑化工夫に努めている。○若手教員の育成に向けて

① 目標を焦点化したカリキュラムマネジメント。具体的には、校訓を生かし、育む資質・能力設定し、全ての活動（教師・生徒）を一本化
② 参画意識高揚のため、校内委員会は勉強会（OJTの場）と捉える。また、研修、授業参観（他校）の奨励
③ 身に付ける優先を明確にした初任者研修の充実。授業、生徒指導、学級経営の順

【所感】

佐賀県の提案では、市校長会がリードし、勤務時間終了後に市内教師対象の研修会を開催していることに驚かされた。校長会、教師の熱意を感じるとともに、「授業改善の空気の変化」をどのように起こしていくのか考えさせられた。

三 記念講演

演題…「今求められる学びの姿〜人工知能時代に求められる学びの姿〜」

講師…神野元基氏

AI教材Qubena（キュビナ）開発を手掛け、中教審臨時委員等公的な役職を歴任、私立中・高校長、会社経営、現在は宮崎市教育CIOとして先進的な教育に携わっている。

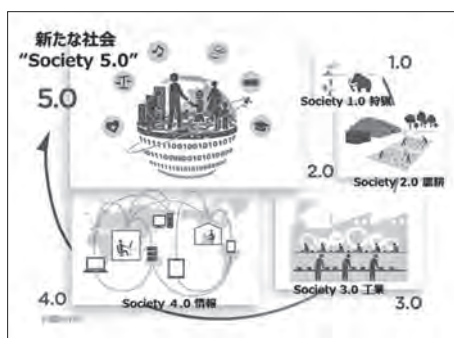
初めに、「自主性」と「主体性」の違いは？という問いかけから講演はスタート。「自主性」とは他人の決めたことを自分でやることであり、「主体性」とは、やる、やらないを含め、自分で決めることである。自分でやる、やらないを決められる子を育ててほしい。もちろん、「自主性」も大切（これで動かないといけないこと、場面もある）

「自主性」と「主体性」の関係はやかいかであり、自主性を育てようとすれば、するほど「主体性」は育たない。産業の変化（半導体（設計・製造）※特にAI（人工知能）・ソフトウェア・アプリ）も当然生き方、教育に影響。

AIの進化の進化により世界の文化、宗教、価値観の違いがリアルタイムで感じられるようになる。結果、分断・衝突を個人レベルで意識せざるを得ない世界へと変わっていく。そんな世界で私たちの生き方はどうなるのか。

GIGAスクール構想とソサエティ5.0について次のように説明。

ソサエティ5.0の社会では様々な分野で変化する。教育分野も変化する。それぞれのソサエティでの人間の生き方、優秀な人間の定義も変化してきた。技術的特異点（シンギュラリティ）によりさらに先の社会遠い未来ではない。ソサエ



ティ5.0に乗り遅れた国はどうなるのか。社会（の要請）に応じて教育も変化する。ソサエティ5.0（超スマート社会）に向けた学校はVer.3（学び）の時代を迎える。

これまでの教育実践の蓄積×ICT（生成AIによる学習伴走も含む）により個別最適化・主体的・対話的で深い学びを通して資質・能力を確実に育成する。これがGIGAスクール構想であり、ソサエティ5.0で、必要な力を備えるための「学び」が求められている。

【所感】

教育現場において、日常的に世界や社会の急激な変化について思いを巡らせことはあまりない。講師の「ソサエティ5.0に乗り遅れた国は：」は、そのままだ、「ソサエティ5.0に乗り遅れた学校（教育）は：」と置き換えられる。また、現状として学校は、Ver.2（学習の時代）のままであり、その先の学校のイメージが持ててないと感じた。

おわりに

令和五年度の大分大会に続き参加の機会を得た。全日中報告の中で青海会長が、「校長会があるからこそ、現場の声を届けることができる」と、会の意義を説明していた。分科会では、学校経営と教職員の育成について、提案校長の工夫と熱意を強く感じた。また、九州各県の先生方との各県や自校の状況取組についての情報交換も有益であった。記念講演を通じ、Ver.3（学び）の時代に向けた授業時間の改善が急務だと痛感した。

学校経営の方向性を決め手となる材料、根拠、情報を多く得ることができた。校長会、研究大会あつてのことであり、今後の学校経営改善に生かしていきたい。また、地震後の大会運営に当たった宮崎県中学校校長会のみなさまに感謝いたします。

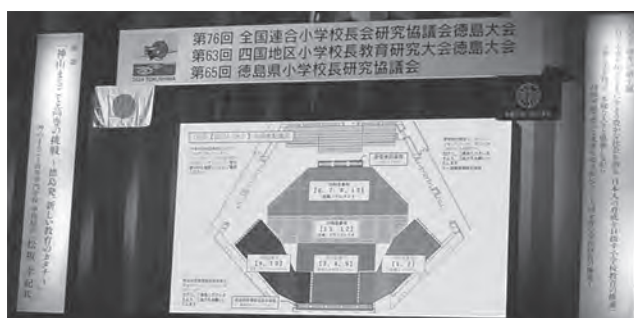


宜野座村立宜野座小学校 校長 新城 雄二郎

第七十六回全国連合小学校長会研究協議会徳島大会に参加して

はじめに

「自ら未来を拓きともに生きる豊かな社会を創る日本人の育成を目指す小学校教育の推進」を大会主題に、「夢と志を持つて多様な人々と協働しながら持続可能で豊かな未来を切り拓いていく人材を育む学校経営の推進」を副主題として、第七十六回全国連合小学校長会研究協議会徳島大会が、令和六年十月二十四日（水）二十五日（金）の



日程で、徳島県アステイとくしまを主会場とし、他四会場で開催された。全国からは総勢二千二百名程の参加があり、沖縄県からは、田島正敏大会運営委員・松尾剛大会宣言文審議委員・崎原永輝事務局長を含む二十五名による参加となった。

二 開会式

開会式では、全国連合小学校長会植村洋司会長より、大きく次の三つの話があった。

- (1) 教育改革の時節、「学校における働き方改革は喫緊の最重要課題である。」
 - (2) 中央教育審議会特別部の「審議のまとめ」を肯定的に受け止め、確実な実現を切に願うスタンスであること。
 - (3) 教育に携わる者が「一枚岩」となり、一体感と凝集性の高い全連小が、先頭に立ち国を動かしていく必要がある。
- 特に印象的だったのは、本研究協議会が「校長にとつて最大の研修の場である」という熱いメッセージと都道府県の枠組みを越えたつながりを感じ、多くの学びを持ち帰って欲しいという言葉であった。「全小連は一つ」の心意気を我がこととして改めて感じることのできる瞬間であり、協議会の始まりに胸躍らすことができた。

三 文部科学省講話

「教師を取り巻く環境整備と今後の教育課程等の在り方について」

文部科学審議官 矢野 和彦氏
講演では、教師を取り巻く環境整備と今後の教

育課程等の在り方について、客観的なデータをもとに、審議官よりきめ細かな説明があった。令和の日本型学校教育が構築された背景や、学校における働き方改革から子供たちへのより良い教育への流れ、教師の勤務実態と教師を取り巻く環境整備の経緯等、根拠となるデータや言葉からより深く理解することができた。講演の柱を次の九つと捉えた。

- (1) 令和の日本型学校教育は知徳体の三位一体の取れた全人教育に大きな影響力を担っている。
 - (2) 学校では、いろいろな課題に対応していく宿命のようなものがある。
 - (3) 産休代替の教師を確保できない厳しい人手不足の実態がある。
 - (4) 昭和三十三年の学習指導要領にも個性・多様性を重視することは示されているが五十人学級等実態がそぐわない現実があった。
 - (5) 日本型学校教育では、正解のない設問（課題）を自ら適切に設定し打ち破っていくことが重要である。
 - (6) 人材確保法及び給与の水準について
 - (7) 諸外国における近年の教師の処遇改善傾向
 - (8) 学校のネットワーク改善のための支援制度
 - (9) 学習指導要領とGIGAスクール構想の関係
- 沖縄県の教職員課題である、採用数を上回る学級数の増加・教職員希望者の減少・業務の多忙化・長時間勤務の増加にも繋がる内容で、教師を取り巻く環境整備について、校長として具体的に考えるより良い機会となった。

四 分科会

5つの研究領域（学校経営・教育課程・指導育成・危機管理・教育課題）が計十三の分科会に分かれ、五会場で行われた。

○第三分科会

研究課題「学校教育の充実を図るための評価・改善」

改善

- (1) 視点①「学校経営の組織的かつ継続的な改善に向けた学校評価の充実」組織的な評価・改善による持続可能な学校経営・学校評価の充実及びエビデンス評価・「石狩の教育」の人材育成評価に基づく学校経営

北海道 北広島市立大曲小学校 内海 洋
大曲小学校のある石狩管内は札幌市に隣接する七つの市町村で構成され、約百校の小・中・義務教育学校が組織的・協働的に「石狩の教育」を推進している。石狩の教育では、「人材育成（評価）シート」を管内校長会及び教頭会の共同で検討・作成し運用している。教員一人をピックアップし、これを教頭がどうマネジメントし、校長がどう判断するか等、管理職の密な連携も問われていることが理解できた。発表者からは年間を通し、教師としての成長を見届けきめ細かに分析できることも利点であるという言葉があった。人材育成（評価）シートを活用することで、ミドルリーダーの成長・学校運営への参画・次期管理職候補の資質能力の向上等に繋がる有効性を感じた。

- (2) 視点②「教職員の資質・能力の向上に向けた人事評価の工夫」今後の学校運営を担う人材を育成する研修と評価について「香川県教員等人材育成方針」に沿って

香川県 観音寺市立柞田小学校 小西 寛
研究発表では、学校運営の核となる中堅教員二名を取り上げ、人材育成と人事評価について香川県教員等人材育成方針に基づき、その関連を考察していた。校長として、香川県教員等人

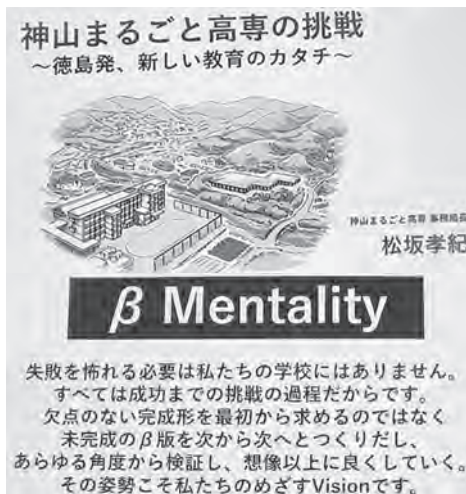
材育成方針に沿い、人材育成の視点を持ち続け適材適所に抜擢し、その達成状況をつぶさに見守る重要性を改めて感得することができたと述べていた。日常の観察や指導を適切な人事評価につなげることは、私の学校経営上でも課題となる部分だけに、参考になる言葉であった。今後の学校運営を担うミドルリーダーを育成する研修や評価について改めて再考することのできた研究発表であった。

五 講演

演題「神山まると高専の挑戦
～徳島発、新しい教育のカタチ～」

講師 神山まると高等専門学校事務局長
松坂 孝紀氏

松坂氏の冷静なる熱量と、子ども達をセンターにした考え方が会場全体を終始圧倒していた。神山まると高専のコンセプトである「モノをつくる力でコトを興す人を育成したい・社会に役立つ学びをつくりたい」は、私達が預かる小学校現場



にも通ずるものがあると感じ、共感できる内容が溢れていた。特に印象に残ったのは次の三つである。

- (1) 最後のピースは学生である。
(2) 学生を大人として信じ「やりたい」を全力で応援する。

(3) β Mentality 欠点のない未完成を最初から求めるのではなく未完成のβ版を次から次へとつくりだし、あらゆる角度から検証し、想像以上に良くしていく

松坂氏の言葉を言葉とし、今後の学校経営の支えになればと強く思える時間であった。

六 おわりに



校長二年目を迎える私にとって、全国連合小学校長会研究協議会において、県内はもとより全国各地の校長と様々な情報を交換できたことは今後の学校経営を支える礎となります。このような協議会を開催していただきました全国小学校長会・徳島県小学校長会の皆様心から感謝申し上げます。また、徳島の地で共に研修を重ねた沖縄県小学校長会の皆様には、沖縄県教育の限らない発展へ、共に尽力することを誓い、本研修の報告とします。

第七十五回 全日本中学校長会研究協議会岩手大会 参加報告



「黄金の國」岩手大会に参加して

沖繩市立山内中学校 校長 多和田 勝

一、はじめに
「未来への一歩を 共に 黄金の國いわてから」を大会スローガンに第七十五回全国中学校長会研究協議会が十月十六日・十七日の二日間にわたって開催された。

昨年の大分県大会は四年ぶりの参集型開催で九州大会も兼ねていた関係もあり、沖縄県の参加は例年より多い六十三名であった。今回は十八名で例年並の参加であったが、全国からは昨年以上を上回る千七百四十五人が参加し、盛岡市を主会場に全体協議会、分科会、記念講演等が盛大に催された。



二、「VUCA」(ブーカ)の時代

開会式では大会長で全日本中学校長会会長の青海正氏と実行委員長で岩手県中学校長会会長の小野寺哲男氏があいさつを行ったが、二人とも現代は「VUCA(ブーカ)の時代」であることを強調して話された。「VUCA」とは変動性、不確

実性、複雑性、曖昧性の英語の頭文字をとった略語であるが、将来の予測が困難な時代に、子ども達が柔軟に対応しながら、主体的に向き合い、関わり合って自らの可能性を発揮し、未来社会を創り出す「生きる力」としての資質・能力を育むことが求められており、その学びを支えていく必要性を提言し、校長の自覚と本大会の開催意義を確認した。

三、文部科学省説明

文部科学省の田村学主任視学官より「当面する初等中等教育上の諸課題」として用意した八本の資料の中から、次の四本を説明された。

○教育を取り巻く環境整備について
教員の人員確保や働き方改革、処遇改善、部活動の地域地域移行等

○教師の資質能力の向上について
「全国教員研修プラットフォーム」の構築・運用とオンライン研修コンテンツの充実等

VUCA(ブーカ)の時代

- Volatility : 変動性
- Uncertainty : 不確実性
- Complexity : 複雑性
- Ambiguity : 曖昧性

○GIGAスクール構想の推進について
学校のネットワークの課題と対応策や「格差」と「浅い学び」への警鐘

○いじめ・不登校支援対応等について

いじめ防止に向けた総合的な対策の推進と不登校児童生徒への支援に対する基本的な考え方等どれも大変参考になる説明であったが、沖縄県が抱える大きな課題「特別支援教育について」の説明は五本目に用意されており、時間の関係で割愛されたのは残念であった。

四、全体協議

第一研究協議題は「学校からの教育改革」を主題にウエルビーイングを高めるこれからの中学校教育について全日本中学校長会総務部長清野正校長が提言を行った。

働き方改革に関する教員の意識として
○授業、授業準備や生徒指導(個別)等の業務については相対的に負担感が低く、重要度は高い
○調査への回答や地域対応の業務については、相対的に負担感が高く、重要度は低いと考えている。

など、働き方改革を進めるうえで大いに参考になる提言であった。

第二研究協議題は「明確なビジョンのもと、活力ある組織・運営体制を築くための校長の在り方」を主題に、へき地校の特性を活かした実践を通して香川県土庄町立豊島中学校の池田憲生校長が提案を行った。

へき地校や小規模校の多い沖縄県とも共通する課題が多く、地域コミュニティの核となる学校を目指すことなどは大いに参考になった。

五、分科会

全日本中学校長研究協議会は「①教育課程」「②確かな学力」「③豊かな心」「④健やかな体」「⑤進路指導」「⑥生徒指導」「⑦人材育成」「⑧学校経営」の八つの分科会から構成されており、九州・沖縄校長研究大会の六つの分科会は、全日中の③④と⑤⑥を統合して行われた。

国頭二人、中頭三人、那覇四人、島尻三人、宮古二人、石垣四人の本県から参加した一八人は、各分科会へ割り当てられた。全体では第一分科会「教育課程」が五百五十三人、第二分科会「確かな学力」が三百七十七人の参加で人気があった。



私が参加した第八分科会は、九州地区担当の分科会で大分県宇佐中学校より

○学校と地域の連携・協働による「チーム学校」と「働き方改革」の実現

熊本県高森東学園義務教育学校より

○義務教育学校の特長を生かす「チーム学校づくり」の二本が発表された。

グループ協議は和やかな

雰囲気で行進できるように司会役の工夫が準備されており、本音を語り合い、有意義な時間が過ごせたと好評であった。

私のグループは青森県、秋田県、宮城県、静岡県、大阪府、沖縄県の六人で編成され、東日本大震災、熊の被害対策、小中連携、スポーツでの地域おこし等、その地域独特で様々な話が飛び交い勉強になったが、沖縄については、やはり観光や米軍基地関連への興味関心が高かった。

各県校長の表現力の豊かさに感心し、「サーバントリーダーシップ論」など共感できる内容も多く、有意義な時間を過ごすことができたが、教員不足や働き方改革については沖縄県以上に深刻な悩みを抱えている県が多いことも実感した。

六、記念講演「ブラックホールへの旅」

記念講演はブラックホールの撮影に成功した国際プロジェクト日本側研究者の代表で、国立天文台水沢V L B I観測所所長の本間希樹氏による「黄金の國いわて発 銀河系経由 ブラックホールの旅」と題したスケールの大きな夢のある内容で、ユーモアを交えながら楽しく展開された。

○理数教育は 日本の将来にとって極めて重要

○人類の発展は「役に立たない研究」の積み重ねが土台

○生まれたばかりの赤ん坊は将来何の役に立つかわからない

○皆様の「人を残す」活動は、これからも日本と世界の発展に寄与



など、我々の仕事を価値の深いものと位置づけて頂き、元気を与えられた。

七、文化の違い

岩手県は「銀河鉄道の夜」で有名な宮沢賢治や石川啄木、初の平民宰相の原敬、現在では大リーグで偉業を達成し続けている大谷翔平などの様々な分野で多数の有名な人を排出しており、歴史の深い格式ある土地柄で、世界の行くべき町として口



ンドンに次いで二位にランク付けされているとの説明があった。

開会式での国歌斉唱は思いっきり熱唱する校長先生が多く、千七百名余りの低音で地響きが伝わるような大合唱は、沖縄では聞いたことがなく、深く印象に残った。

また、校長会は同年代の集団でもあり、休憩時間はトイレがテーマパーク並みの大行列となったが、機械のように集団が動き、回転の速さにはさらに驚いた。全国大会では随所に文化の違いを感じる場面があった。

八、おわりに

校長研究大会に参加された先生方は「貴重な経験になった。」と口々に話さる。

「認知能力」と「非認知能力」のように、学校長にも見える力と見えない力が必要であり、各種校長研究大会、特に県外の経験は見える力も得られるが、見えない力の成長にも繋がると考える。今後も沖縄県校長会、研究大会のますますの発展を祈念したい。



第六十五回 沖縄県中学校長研究大会・中頭大会



沖縄県中学校長研究大会 中頭大会を終えて

うるま市立高江洲中学校 校長 塩川 斉

一 はじめに

令和六年度、第六十五回沖縄県中学校長研究大会が十一月七日（木）・八日（金）嘉手納町文化センターを主会場として、かでな未来館、嘉手納町中央公民館にて分科会、懇談会が行われました。

嘉手納町には「耕す土地が無ければ頭を耕せ」という言葉があるほど、教育に対する情熱あふれる街であり今回の会場にふさわしい場所です。

今回の大会は、小学校が九州地区小学校長協議会研究大会沖縄大会と合同となったため、中学校単独開催となりました。

二 地区の取組み

四年ぶりに参集型で開催された国頭地区からパトンを受け継ぎ、中頭地区で開催されることになった第六十五回沖縄県中学校長研究大会は、中学校のみの単独開催となり開催の企画運営に関しては中学校の校長で行うこととなりました。

会場につきましては、昨年度の国頭大会の時点での告知から会場変更になり、ご心配をお掛けしたことを深くお詫び申し上げます。急な変更でしたが会場を快く引き受けていただいた嘉手納町や多大なご協力をいただいた嘉手納町教育委員会の皆様に感謝申し上げます。

今年度は中頭地区中学校長会の役員の入替えがあつたためフレッシュなメンバーでの運営となりました。本大会に向けて、数回にわたり、全体役員会及び各部会を開催し、大会に向けた実施計画や業務の確認及び、進行状況の確認等を行ってまいりました。本大会初参加となる役員が殆どでしたが、総務部長の新垣和哉校長を筆頭に運営部長の新垣邦彦校長、研究部長の仲宗根政人校長がリーダーシップを発揮し、担当業務を適切に指揮し、大会にむけ準備を進めてまいりました。

今回は中学校のみの大会となったため、大会の規模は例年より小さくなりましたが役員の数も少なくなり、中学校長だけでは対応する事が厳しい大会になりました。そこで、小学校の校長先生方に協力依頼をかけたところ、十四名の校長先生が快く引き受けて下さり、当日の大会運営にご協力いただきました。この大会を成功に導いたのは、中学校長のみならず小学校長や嘉手納町教育委員会の協力があつてのことです。まさに、「中頭は一つ」の合い言葉どおりの連携・協働を実践しました。

三 大会二日目

今回の大会は、主会場と分科会会場が徒歩で移動できる場所にあり、大会開始から終了まで大

く分散することがなかった反面、大会場に駐車場がなく、バスでの送迎を行う事となり、ご不便をおかけしました。

全体会場は九百名以上の収容人数に、約百四十名の参加人数でしたので、大変ゆとりをもって使用することができました。



開会式では大会長新地康秀県中学校長会のあいさつ、半嶺満県教育長あいさつ、當山宏嘉手納町長による歓迎のあいさつ等滞りなく進め大会初日を開始する運びとなりました。

続いて半嶺満県教育長から「本県の課題と対策」と題してご講話いただきました。冒頭では、初任校であつた具志川高校へ、校長として赴任した数十年後も、ノーチャイムや弁持参などが継承されていることに感動した事や、本県の高校生や中学生のスポーツを通して活躍に希望を持つた事を話されました。

本題については「働き方改革推進課」の立ち上げや「皆の学校ピースフルプラン」の作成について、また、メンタルヘルスに関しての「三つの予防・五つのケア」についてや学力向上に向けたマネジメントサイクルの大切さ、未来社会を創造する主体としての自覚を持った子どもたちの育成のための取組み例として「朝鑑賞」の事例等をあげ、大変有意義な時間でした。

午後の分科会は、かでな未来館で三分科会、嘉手納中央公民館で三分科会の六分科会に分かれ第一部は各分科会の課題について代表者の発表をも

とに有意義な討議が行われました。さらに、第二部として全部会共通課題『中学校期の学力課題の改善（自校の「めざす生徒像」実現に向けた校内研究の充実）』として協議が行われ、各校の実践発表に対して、意欲的に質問する場面が多く見られました。

夕方の懇談会では私たちの心配をよそに、多くの会員が参加し、盛大に行われました。浦崎直哉嘉手納町教育長、伊波寛仁中頭教育長のあいさつ等があり、その中で本大会冊子の表紙についてのエピソード等が語られました。また、翌日に記念講演をいただく水谷年孝氏、大城智紀氏も参加いただき、嘉手納町内業者によるケータリングに舌鼓を打ちながら、会員同士の親睦を深めました。

また、嘉手納中学校生徒徒によるドローン飛行も披露され、会場を沸かせ、多様な学びの中学生の姿を見ることができ、DXな懇親会が行われました。



四 大会二日目

全体協議会として與那嶺正県中学校総務部長より力強く「大会宣言文」が読み上げられました。次に多和田勝県中学校研究部長より、全国大会や九州大会の様子、今後の大会主題の変更等の内容等を交えての「総括」があり、例年と指向をかけた形で行われました。さらに、沖縄県校長における九州大会への参加率の話もあり、今後多くの校長が各研究大会等に参加できるようにする事の大切さを考える機会にもなりました。

五 記念講演

講師に教育DX推進専門官である水谷年孝氏と県立学校教育課教育DX推進室主任指導主事の大城智紀氏の二人をお招きして「一人一台端末＋クラウド環境の日常的活用による主体的な学びの実現と校務・研究改善」の演題による講演をいただきました。



水谷氏は「ICTを使ってどんな学びができるようになるか、何のためにどこをめざすかそのことが共有されているかが大事」また「教師が仕事で活用しICTを理解していくことが授業を変え、チームで推進することを応援することも大事であること、次の学習指導要領に繋がる論点整理の紹介等もありました

大城氏はセカンドGIGA「次年度からは活用のフェーズに入る」校務、授業、研修は相似形であり三つは一緒に考えていく事が重要であること、働き方改革は「べき論を見直して新しい考え方していく」等を示唆して頂き充実した記念講演となりました。

六 終わりに

多くの方のご協力のもと、第六十五回沖縄県中学校長研究大会（中頭大会）を無事終えることができました。今回は中学校単独開催となり、役員の人数や過去の大会経験者も少ないなかで、多くの不安がありました。

実際に、行き届かない部分もあり大会参加者全員が満足のいく形ではなかったかも知れませんが、少人数体制ではありましたが、各役員が一つ一つ責任を持って役割を果たすことができたこと、小学校校長のみなさんからの校種を超えたご協力があり、「大会成功」に向けて中頭地区みんなの思いがひとつになったことは、今大会の大きな成果の一つだと感じています。

本大会を実施するにあたり、県校長・役員の校長先生方、事務局の崎原永輝事務局長には大変お世話になりました。また、大会開催に多大な支援を頂きました嘉手納町や会場調整やマイクロバスの手配、駐車場の確保等に協力頂いた嘉手納町教育委員会、北中城村、中頭地区の各学校関係者の皆様、さらに、昨年度の資料を提供していただいた中頭地区事務局の皆様にお礼を申し上げます。

次年度開催は、那覇地区になります。次年度より小中合同の校長研究大会になります。

全県の校長先生方との再会を楽しみにしております。

今後とも、お互いのリーディングケースや課題を共有し、最適解を共に考える有意義な研究大会を祈念いたします。

今大会の関係者各位に、心より感謝申し上げます。



令和 6 年度 文部科学大臣賞受賞者

又 吉 直 正 (宜野湾市立真志喜中学校長)

仲 田 欣 五 (名護市立屋部中学校長)

沖縄県小・中学校長会会報第87号

発行者 沖縄県小・中学校長会

住 所 那覇市松尾1-6-1 (沖縄県教職員共済会館八汐荘3F)

電話 098-943-9747 FAX 098-943-9748

E-mail: oki-koutyukai2@kca.biglobe.ne.jp (事務局長)

oki-koutyukai1@kpe.biglobe.ne.jp (事務局員)

印 刷 株式会社 国 際 印 刷

電話 098-857-3385 FAX 098-857-3892

E-mail: kokusai@herb.ocn.ne.jp
